View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

地域文化創生に向けた「文楽はちのへ塾」の実践的研究

著者	川守田 礼子, 熊谷 浩二, 小坂谷 壽一
著者別名	KAWAMORITA Reiko, KUMAGAI Koji, KOSAKAYA Juichi
雑誌名	八戸工業大学紀要
巻	36
ページ	31-39
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1078/00003610/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

八戸工業大学紀要　第 36 巻（2017） pp. 31 - 39

地域文化創生に向けた「文楽はちのへ塾」の実践的研究

川守田 礼子[†]・熊谷 浩二[††]・小坂谷 壽一[†††]

Practical Research in "Bunraku Hachinohe School",the Cultural Seminars for Regional Culture Creation

Reiko KAWAMORITA[†], Koji KUMAGAI[††] and Juichi KOSAKAYA[†††]

ABSTRACT

The Bunraku puppet show is one of the traditional public entertainments of Japan. This year, Hachinohe Institute of Technology held "Bunraku Hachinohe School" as cultural seminars, in which residents and students learn together. In this paper, practical approaches for regional culture creation in the seminars are reported.

Key Words: *Bunraku puppet show, Bunraku Hachinohe School, regional Culture Creation*

キーワード : 人形浄瑠璃文楽，文楽はちのへ塾，地域文化創生

1. はじめに

人形浄瑠璃文楽は、太夫の語りと三味線による浄瑠璃（義太夫節）に三人遣いの人形が結びついて発達した、世界でも類を見ない芸術性の高い人形劇である。歌舞伎や能楽と並びユネスコ無形文化遺産に登録されており、日本を代表する伝統芸能である。江戸時代、大坂に生きる人々の義理、人情、忠義、恋愛といった人間的葛藤を人形に仮託して表現した劇世界は、人間洞察や社会理解に対する示唆に富み、現代に通じる普遍性を有している。しかし、歌舞伎や能楽に比べ、人形浄瑠璃文楽の一般的認知度は低い。特に八戸市では、人形浄瑠璃文楽の公演がほとんどなく、地域住民の直接鑑賞機会は極端に少ない。

2014～2015 年度、八戸工業大学防災技術社会システム研究センターサテライト「HIT ウィークエンド講座」において、人形浄瑠璃文楽を紹介する講座を実施したところ、来場者からの反響が大きく、伝統芸能の価値と地域住民の関心の高さを確認することができた。

そこで、2016 年度はその活動を発展させ、人形浄瑠璃文楽講座の単独開催を企画し、八戸工業大学文化講座「文楽はちのへ塾」と題して、年間 4 回の連続講座を学外施設で開催することとした。本講座の開催を通して、地域住民の伝統芸能や文化芸術に対する受容性を高め、地域の文化力向上への取り組みの一つとしたい。本稿では、「文楽はちのへ塾」を核とした地域文化

平成 29 年 1 月 10 日受付

† 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授
†† 工学部土木建築工学科・教授
††† 工学部システム情報工学科・教授

創生に向けた実践的研究について報告する。2016 年度の講座実施および研究成果の報告は年度末に単行本という形でも示す予定である。

なお、「文楽はちのへ塾」の計画にあたり、先行事例として大阪市立大学大学院文学研究科・文学部で 2004 年度に開設した特別授業科目「上方文化講座」を参考にした。「上方文化講座」は、同研究科の二十一世紀 COE プログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の一環として位置づけられ、「文楽を学問的体系のもとに総合的に学ぶ」という目的のもと、文学研究科教員と文楽技芸員の共同作業により現在まで継続運営されている。

2. 文化講座「文楽はちのへ塾」

2016 年度文化講座「文楽はちのへ塾」の開催スケジュールは、**表 1** の通りである。気軽に参加してもらうため事前申込不要の無料講座とし、各回 90 分で実施した。なお本講座は、2017 年度に感性デザイン学科に新設される「文化コミュニケーションコース」の教育目標および内容と関連付け、感性デザイン学科共催で実施した。

会場は地域住民の利用しやすさを考え、八戸市中心街にある「はちえきキャンバス in 八日町」会議室を使用した。本施設は八戸液化ガス株式会社が地域活性化を目的に開設した文化施設である。広報は、八戸工業大学および感性デザイン学部ホームページでの告知、八戸市内関係各所および会場における講座チラシ（**図 1**）の掲示・配布、八戸市広報誌「広報はちのへ」での告知等によって行った。

今年度の演目は、人気の高い近松門左衛門原作の世話物の中から『曾根崎心中』、『冥途の飛脚』の二作品を選択した。複雑な人間関係と特殊な様式性を有する時代物と比較して、庶民の事件を描いた世話物は現代人にも受け入れやすく、物語の展開や人物造形が理解しやすい。この点が初心者向け講座の題材として適している。特に近松物には、高度な文学性を有し人間洞察に優れた作品が多く、舞台芸術作品としても、古典文学作品としても、多様なアプローチが可能である。また本講座では、人形劇の独自性を体感してもらうために作品鑑賞を重視した。作品鑑賞に使用する映像資料に関しては、技芸員の肖像権等を管理する一般社団法人人形浄瑠璃文楽座むつみ会より事前に映像使用の許可を得た。

表1　文楽はちのへ塾開催テーマ

回	日時	テーマ
第1回	2016年5月27日	『曾根崎心中』① 生玉社前の段
第2回	2016年8月26日	『曾根崎心中』② 天満屋・天神森の段
第3回	2016年12月14日	『冥途の飛脚』① 淡路町・封印切の段
第4回	2016年2月3日	『冥途の飛脚』② 道行相合かご

八戸工業大学文化講座

―文楽はちのへ塾―

このたび、人形浄瑠璃文楽をテーマとした文化講座を企画いたしました。地域の皆さんと文楽について気軽に楽しく語り合い、その素晴らしさを共有する場となればと思っています。人形浄瑠璃文楽の名作を、解説をかみながら鑑賞したのち、そこに描かれている人間模様、「情」の世界について自由に意見交換を行います。ぜひて迎い上げ芸能、人形浄瑠璃文楽を身近に感じてみませんか。

第１回講座を下記の通り開催いたします（受講料無料）。多数のご参加をお待ち申し上げております。

― 第１回講座のご案内 ―

1) 期日：５月 27 日（金）16：00-17：30（90 分）

2) 会場：はちえきキャンバス in 八日町　３階会議室

八戸市八日町５番地　八戸液化ガスビル　TEL.0178-46-3025

3) 内容：『曾根崎心中（そねざきしんじゅう）』

※事前お申し込みは不要です。当日、会場までお越しください。

※第２回以降の講座スケジュールは初回講座にてご案内いたします。

（年４回の講座を予定しておりますが、各回個別受講も可能です）

講座に関するお問い合わせ・お申し込み：

八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科　川守田紀子

TEL.0178-25-8292　FAX.0178-25-7339　E-Mail:nako@hi-tech.ac.jp

研究協力・共同開催者：

八戸工業大学工学部土木建築工学科　熊谷浩二　E-Mail:kumaga@hi-tech.ac.jp

八戸工業大学工学部システム情報工学科　小坂忠義一　E-Mail:kosakaya@hi-tech.ac.jp

主催：八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科

図1　文楽はちのへ塾講座チラシ

図 2 に実施済みの第 1〜3 回の受講者数をまとめた。地域住民と八戸工業大学学生がともに学びあう相互学習の場と位置づけた本講座には、工学部および感性デザイン学部の学生も参加した。一般は、平日の 16：30〜18：00 に開催したため、熟年層の参加者が多かった。また、**図 3** に示すように女性の比率が高かった。

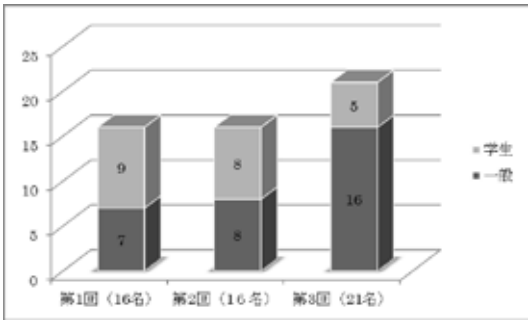

図2　受講者数

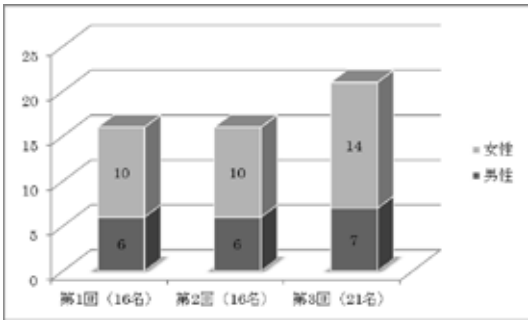

図3　受講者数（男女比）

2.1 第 1 回講座

第1回は2016年5月27日に開催し、『曾根崎心中』第1部として「生玉社前の段」を扱った。講座の流れは表2の通りである。

表2　第3回講座の構成

内容	時間
1.講座趣旨・文楽の概要説明(スライド)	20分
2.作品・本段の概要説明(スライド)	30分
3.「生玉社前の段」鑑賞・解説(DVD)	30分
4.まとめ、質疑応答	10分

配布資料として、原文テキストと現代語訳本を配布した。原文テキストには、文楽公演における現行曲として、第154回文楽公演（2006年2月国立劇場小劇場）「文楽床本集」より『曽根崎心中』本文を収載した。現代語訳・校注は、『新編日本古典文学全集　近松門左衛門集②』に依拠した。作品鑑賞は日本放送協会（NHK）「芸術劇場」（2008年2月29日放送）の映像資料を使用した。2007年11月、国立文楽劇場での吉田玉男一周忌追善狂言『曽根崎心中』を録画したものである。

『曾根崎心中』は、上中下三巻「生玉社前の段」「天満屋の段」「天神森の段」で構成され、醤油屋手代の徳兵衛と堂島新地の遊女お初の恋を描く。第1回では、上之段「生玉社前の段」を中心に紹介した。作品鑑賞の前に解釈のよりどころとなるよう、『曾根崎心中』の概要と作品的価値、近松心中物の特色、「生玉社前の段」の見どころなどについて解説を行った。初心者にはなじみにくい文言等も多いので、一部原文テキストを参照しながら事前説明を加えた。

市井の小さな事件を普遍性のあるドラマに仕立てた本作品には、人物造形や心理描写の随所に近松の手腕が光っており、文学的な価値も高い。また、死生観や恋愛観など近松心中物の革新性について述べた論考も多いことから、それらのいくつかを紹介した。

写真1は講座の様子である。受講者の感想の一部を以下に挙げる。

- 文楽の基本から役割の名前や偉人の活躍など、今まで知らなかったことをきちんと知識として覚えることができた。
- 人形を三人で動かしていることを初めて知った。実際の映像を見たら一人で動かす人形の動きより細やかで表現が豊かで驚いた。
- 全て古語で語られていたので分からないのではと思ったが、まるで生きているように動く人形の動作や太夫の声の強弱やメリハリで不思議と何を話しているのかが何となく理解できた。

- 太夫さんの言葉の節というかイントネーションが独特でとても印象に残った。
- 時代物の他に現代の私たちも楽しめそうな恋愛や事件について描かれた世話物、いわゆるゴシップのような作品もあるのでとても興味が持てた。
- 観てもいいけど物語の内容がわからない、何を観ればいいのかわからないという人も多いと思うので、このように講座の形から足を踏み入れて、そこから興味や関心が広がっていくといいなと思う。
- 文章で読んだときの掛詞が冒頭だけでも多数あって、どの言葉がどこにかかっているのか考えながら読むこともとても楽しく感じた。
- ほぼ初めて触れる人形浄瑠璃文楽だったので、聞きたい事がたくさんあった。なぜ？どうして？と思う事が多々あったものの質問のタイミングが無く、どんどんと話が進んでいき、話についていくので精いっぱいだった。
- 一人だけ顔が出る主遣いの顔が人形のすぐ側にあるのが少し不気味だったが、先生曰く生で見ると全然気にならないとか舞台の魔力があるとか…本物の舞台が気になってしまった。
- ある一瞬だけであるが、人形遣いが気にならないシーンがあった。生玉社前の段の最後で、主人公徳兵衛がとぼとぼと歩くシーンである。

以上のように、人形浄瑠璃文楽への導入的な役割は果たせたように思う。このような舞台芸術は、作品鑑賞の与える影響が最も直接的で大きいことを痛感させられる感想が多かった。言葉はあまり理解できなくても、太夫や三味線人形遣いの芸によって「何となく伝わってくる」という感覚が生まれている。また、作品鑑賞前に「舞台を真剣に見ていると人形遣いが視界から消えることがある」と説明したのだが、この点を共有できた受講者がいたのは大変喜ばしいことであった。世話物作品はやはり受け入れやすかったようで、特に女子学生からの反響が多かった。しかし、作品解釈に関する情報提供のボリュームがやや大きく、初めて人形浄瑠璃文楽に接した受講者の疑問や新鮮な発見を吸収・共有する時間を設けるべきだったのが反省点である。

写真1　第1回講座の様子

2.2 第 2 回講座

第2回は2016年8月26日に開催し、『曾根崎心中』第2部として「天満屋の段」および「天神森の段」を扱った。講座の流れは**表3**の通りである。

表3　第2回講座の構成

内容	時間
1.講座趣旨・文楽の概要説明(スライド)	10分
2.作品・本段の概要説明(スライド)	20分
3.「天満屋の段」鑑賞・解説(DVD)	30分
4.「天神森の段」の概要説明(スライド)	10分
5.三味線演奏(実演)	10分
6.まとめ、質疑応答	10分

第1回講座と同様、原文テキストは第154回文楽公演（2006年2月国立劇場小劇場）「文楽床本集」、現代語訳・校注は『新編日本古典文学全集　近松門左衛門集②』に依拠した。講義は同様にPowerPointスライドを用い、第1回と同じ映像資料を作品鑑賞に使用した。

第2回では、中之段「天満屋の段」および下之段「天神森の段」を取り上げた。「天満屋の段」は、徳兵衛・お初が心中を決意する重要な場面である。「天神森の段」は、心中を覚悟した男女が死の旅に出る道行を描く場面である。鑑賞前に原文テキストを踏まえながら、概要や見どころについて説明を行った。

写真2は講座の様子である。受講者の感想の一部を以下に挙げる。人形浄瑠璃文楽で使用する三味線は津軽三味線と同種の太棹三味線である。この音色を生で聞いてもらう目的で行った津軽三味線の実演が好評だった。

- とてもよかった。講師のお話もテンポ良かった。私は歌を習っていて島津亜矢さんのセリフ物を特に歌っている。本日の『曾根崎心中』、次回もとても興味がある。
- 生で作品を見たくなった。津軽三味線の特徴を活かしたリベルタンゴも楽しかった。
- とても楽しい。もっと色々やってほしい。
- 理解できないところもあったが、文楽の理解が深まった。
- 鑑賞の時間をたっぷり取ってほしい。

写真2　第2回講座の様子

2.3 第 3 回講座

第3回は2016年11月25日に開催し、『冥途の飛脚』第1部として「淡路町の段」および「封印切の段」を扱った。講座の流れは**表4**の通りである。

表4　第3回講座の構成

内容	時間
1.講座趣旨・作品概要説明(スライド)	20分
2.「淡路町の段」鑑賞・解説(DVD)	30分
3.「封印切の段」鑑賞・解説(DVD)	30分
4.まとめ、質疑応答	10分

配布資料として、原文テキストと現代語訳本を配布した。原文テキストには、文楽公演における現行曲として、第180回文楽公演（2012年9月国立劇場小劇場）「文楽床本集」より『冥途の飛脚』本文を収載した。現代語訳・校注は、『新編日本古典文学全集　近松門左衛門集①』に依拠した。作品鑑賞には、NHKエンタープライズDVD『人形浄瑠璃文楽名演集　冥途の飛脚』、および、カナダの映画監督マーティン・グロスによる映像作品『冥途の飛脚　恋の道行』の映像資料を使用した。『人形浄瑠璃文楽名演集　冥途の飛脚』は、「淡路町の段」は1993年2月国立劇場公演、「封印切の段」は2002年11月国立文楽劇場公演をそれぞれ収録したものである。

『冥途の飛脚』は『曾根崎心中』と同様、近松門左衛門作の心中物で、上中下三巻「淡路町の段」「封印切の段」「道行相合かご」で構成され、飛脚屋亀屋の若主人忠兵衛と新町遊郭の遊女梅川の恋を描く。第3回では、上之段「淡路町の段」および中之段「封印切の段」を紹介した。作品鑑賞の前に解釈のよりどころとなるよう、『冥途の飛脚』の概要と作品的価値、近松心中物の特色などについて解説を行った。心中へと向かう恋愛悲劇という点では『曾根崎心中』と同じだが、『冥途の飛脚』は主人公の人物造形が全く異なっており、第1・2回講座と比較しながら作品解釈を行った。

「淡路町の段」は、主人公が営む飛脚屋の場面から始まる。大量の荷と金銭を扱う飛脚屋の日常と、為替金に滞りが生じ始めている主人公の破綻の端緒が提示される。友人八右衛門の配慮で危機を脱するも、自制心の甘さゆえ破滅への道を選択してしまう。さらに「封印切の段」

では、八右衛門の真意に気づかず、短慮から身の破滅を招く場面が描かれる。本作品における主人公の破綻の要因は、悪役などの外的存在ではなく主人公の内面の在り方にあるという点が現代的であり、見る者にリアリティを与える。自分が属している社会から知らず知らずに逸脱していく人間の悲劇は、現代に生きる受講者にも訴えかける力が強く、古典としての解釈の幅も広い。文楽作品における忠兵衛や八右衛門の人物造形や演出は、歌舞伎と大きく異なるので、その点も踏まえつつ、受講者の興味を引き出すよう説明を行った。

写真3は講座の様子である。受講者の感想の一部を以下に挙げる。

- 文楽教室、初めての参加だったが、大変理解でき、感謝です。
- 知人の紹介で伺ったが、なかなか興味深いものがあった。
- 浄瑠璃の世界は初めてで今後は少しずつでも鑑賞の時間を増やして行きたい。講師の説明も良かった。
- とてもおもしろかった。田中澄江さんの本で勉強してきたので、とても分かりやすくて良かった。
- サテライト講座で一度人形浄瑠璃を見て以来はまってしまった。NHK「日本の芸能」の人形浄瑠璃を時々見ている。講師の話を伺って以来理解がわかりやすくなった。次回また受講させていただきます。
- 高校卒業後10年間大阪にいたのに文楽に触れなかった事が悔やまれる。今後も楽しみにしている。
- 普段文楽に触れる機会が少ない中、大変勉強になった。床本を事前に見る時間がもう少しあればもっと楽しめたと思う。
- 初めて人形浄瑠璃文楽を見た。言葉が聞き取れずわからなかった。
- テレビで見たりするが、解説がないと物語を理解するのが難しく、興味はあるが回を重ねて見ていく事が必要と思った。
- パンフレットをもう少し多くのところにも置いてほしい。このイベントを知らない人が多くいた。

第3回では、チラシ配布範囲を拡大する、講座案内を受講者や知人に郵送するなど広報に力を入れたことが受講者数増加につながり、会場満員にて盛会に終えることができた。リピーターに加え、新規の受講者も増加した。しかし、地域住民が本講座を知る機会はまだ限られており、今後広報のさらなる強化が必要である。サテライト講座など、過去のイベント参加者への情報発信も必要である。また、ロコミやSNSによる情報拡散も有効であることが分かった。リピーターの受講者は、個人の趣味と関連付けたり、事前学習を行ったりするなど、受講姿勢に積極的なものがうかがえた。

前回講座までの要望等を受け、まずは人形浄瑠璃文楽の芸を体感してもらうことを優先した時間配分とした。鑑賞前の解説は簡潔にし、鑑賞時間を十分に確保し、鑑賞後に語句解説や補足説明を行ったが、初心者には文言や物語の展開に分かりにくい点があったようである。原文テキストや現代語訳本を一部参照して作品解釈を行ったが、今後は文字資料の有効活用など、分かりやすさへの工夫をさらに進めたい。

写真3　第3回講座の様子

2.4 第 4 回講座

第4回は2017年2月3日に開催予定である。『冥途の飛脚』第2部として「道行相合かご」を扱う。他人の金に手を付けてしまった忠兵衛・梅川が、故郷の大和国新口村に逃亡する旅路を描いた段で、近松原作と改作物の相違を比較しながらその劇的効果について考察する予定である。配布資料は第3回講座と同様、原文テキストは第180回文楽公演（2012年9月国立劇場小劇場）「文楽床本集」、現代語訳・校注は『新編日本古典文学全集　近松門左衛門集①』に依拠したものを使用する。また第3回と同じ映像資料を作品鑑賞に使用する予定である。

3. 文楽勉強会

「文楽はちのへ塾」講座番外編として「文楽勉強会」を別途不定期に開催した。商業施設の一角を利用し、入退場自由の無料講座とした。実施目的は、次の三点である。

1) すでに開催した文化講座「文楽はちのへ塾」で扱った演目について、本編では紹介しきれなかった内容に関して追加解説する。
2) これから開催される文化講座「文楽はちのへ塾」への参加を促す目的で、演目の導入的な紹介を行う。
3) より自由な形態で人形浄瑠璃文楽に接してもらう場を提供する。

2016年度の開催内容を**表5**に示した。第1回は『曾根崎心中』最後の段（道行）を取り上げ、「文楽はちのへ塾」第1・2回の内容と連動させ、より詳しく作品世界を知りたいという受講者が演目全体を把握できるようにした。また、12月は時節に合わせた演目として『仮名手本忠臣蔵』の魅力について紹介した。今後は、第3・4回『冥途の飛脚』と連動させ、改作物の『恋飛脚大和往来』を取り上げる予定である。

表5　文楽勉強会開催テーマ

回	日時	テーマ
第1回	2016年9月1日	『曾根崎心中』 天神森の段
第2回	2016年12月7日	『仮名手本忠臣蔵』 塩冶判官切腹の段
第3回	2016年12月14日	『仮名手本忠臣蔵』 祇園一力茶屋の段
第4回	2016年2月予定	『恋飛脚大和往来』 封印切の段
第5回	2016年3月予定	『恋飛脚大和往来』 新口村の段

会場は、八戸市十三日町チーノ八戸1階にある八戸工業大学地域産業総合研究所「産学連携プラザ」を利用した。本施設は、地域のイノベーション創出の推進を目的に、三八地域の企業と大学・高専の研究者とをつなぐ拠点として開設されたものである。商業施設内の通路に面した開放的なスペースで、壁一面をスクリーンとして利用でき、自由参加の勉強会という趣旨にふさわしい空間であった。

広報は、文化講座「文楽はちのへ塾」参加者への告知、および、「産学連携プラザ」でのチラシ（**図4**）の掲示・配布等によって行った。

本勉強会への参加者は少数ではあったが、「文楽はちのへ塾」受講者がリピーターとして参加するなど、熱心な人形浄瑠璃文楽ファンが誕生しつつあることを確認でき、今後に期待が持てる結果となった。今後は勉強会の趣旨を明確するとともに、内容のバリエーションを豊富することで、本勉強会も活性化させたいと考えている。「文楽はちのへ塾」との計画的な連動による学習効果の向上や、受講者の主体的・能動的な学びのサポート的な機能の充実を図るとともに、新規受講者の開拓へもつなげる試みを検討したい。

八戸工業大学

―文楽勉強会のお知らせ―

伝統芸能、人形浄瑠璃文楽に関する鑑賞も含めた勉強会第二弾を下記のとおり開催いたします。
ご興味のある方はお気軽にお立ち寄りください。（無料）

(1) 期日：12月7日(水)、12月14日(水)
両日とも 16：30～17：30（60分）
(2) 会場：八戸工業大学地域産業総合研究所
産学連携プラザ（チーノはちのへ 1F）
(3) 内容：『仮名手本忠臣蔵』をめぐって

※「文化講座―文楽はちのへ塾―」は、
11月25日（金）16：00-17：30
はちえきキャンパスにて開催予定です。

主催：八戸工業大学感性デザイン学部
感性デザイン学科　川守田英子
TEL0178-25-8292
E-Mail:eiko@hi-tech.ac.jp

図4　文楽勉強会チラシ

4. まとめと展望

以上のとおり、「文楽はちのへ塾」を核とした2016年度の取り組みについて述べた。今回の講座実施によって、伝統芸能に親しむ場を提供し、人形浄瑠璃文楽の魅力の一端を地域住民に伝えることができたのではないかと考える。本講座の意義は、上方芸能の人形浄瑠璃文楽への興味関心を引き出し、地域住民の文化受容力を高めるとともに、伝統芸能や古典の鑑賞を通して人間心理や社会構造に対する理解を深める生涯学習機会とすることにある。また、学外施設で地域住民と学生とが共に学ぶ講座として開設することにより、地域住民と大学とを繋ぎ、大学の有する教育資源を地域文化創生に活用できる取組みとして、今後も多様な展開が期待できると考えられる。

今後は、人形浄瑠璃文楽学習を通して、古典・芸術の価値、地域における文化芸能の重要性など総合的に学び、地域の文化力・生涯学習力の向上を図る地域文化創生企画として次年度も活動を継続していきたい。さらに内容をブラッシュアップし、伝統芸能の一線で活躍している技芸員による講座や劇場鑑賞ツアー、地元の伝統芸能の担い手によるコラボレーションイベントの実施といった発展的文化活動に向けての計画を進めていきたいと考えている。また、八戸市には人形浄瑠璃文楽との歴史的な接点は少ないが、東北地方に伝播した「奥浄瑠璃」研究、南部藩が奨励した能楽との関連、三社大祭などの人形山車祭りや地方の人形芝居との関連など、八戸と人形浄瑠璃文楽とを結ぶ糸口がないわけではない。こうした研究も並行して進め、研究成果を講座に還元できるように努めたい。

謝　辞

本講座開催にあたり、映像資料の使用をご許可くださいました一般社団法人人形浄瑠璃文楽座むつみ会には深く感謝申し上げます。また、会場使用に際してご協力・ご支援くださいました八戸液化ガス株式会社代表取締役社長、大黒裕明氏はじめ職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

参考文献

1)大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：上方文化講座　曾根崎心中，和泉書院，2006.
2)公益財団法人文楽協会：文楽協会ホームページ，http://www.bunraku.or.jp/
3)国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 154 回文楽公演平成 18 年 2 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2006.
4)鳥越文蔵，山根為雄，長友千代治，大橋正叔，阪口弘之：日本古典文学全集　近松門左衛門集②，小学館，1998.
5)国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 180 回文楽公演

平成 24 年 9 月），独立行政法人日本芸術文化振興会， 2012.
6)鳥越文蔵，山根為雄，長友千代治，大橋正叔，阪口弘之：日本古典文学全集　近松門左衛門集①，小学館，1997.
7)国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集　冥途の飛脚，NHK エンタープライズ， 2013.
8)マーティ・グロス：冥途の飛脚　恋の道行，Marty Gross Film Productions Incorporated， 2006.
9)独立行政法人日本芸術文化振興会：文化デジタルライブラリー，http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/
10)独立行政法人日本芸術文化振興会：伝統芸能データベース「文楽への誘い」，http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/bunraku/jp
11)国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 181 回文楽公演　平成 24 年 12 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2012.
12)国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 158 回文楽公演　平成 18 年 9 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2006.
13)松崎仁，原道生，井口洋，大橋正叔：日本古典文学体系　近松浄瑠璃集上，岩波書店，1993.
14)土田衛：新潮日本古典集成　浄瑠璃集，新潮社， 1985.
15)大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：上方文化講座　義経千本桜， 和泉書院， 2013.
16)大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：上方文化講座　菅原伝授手習鑑， 和泉書院， 2009.
17)橋本治：浄瑠璃を読もう，新潮社，2012.
18)角田一郎ほか：岩波講座　歌舞伎・文楽　第 8 巻　近松の時代， 1995.
19)鳥越文蔵，信田純一，内山美樹子，井口洋：近松への招待　岩波セミナーブック 31，岩波書店， 1989.
20)園田学園女子大学近松研究所：近松研究の今日－近松研究所五周年記念講演集－，和泉書院， 1995.
21)深澤昌夫：現代に生きる近松－戦後 60 年の軌跡－，雄山閣， 2007.
22)原道生：近松浄瑠璃の作劇法，八木書店， 2013.
23)国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集　通し狂言　仮名手本忠臣蔵，NHK エンタープライズ， 2010.

要　旨

人形浄瑠璃文楽は日本の伝統芸能の一つである。八戸工業大学では今年度、住民と学生がともに学びあう文化講座として「文楽はちのへ塾」を開催した。本稿では、本講座における地域の文化創生に向けた実践的試みについて報告する。

キーワード：人形浄瑠璃文楽，文楽はちのへ塾，地域文化創生